

恐竜・古生物の魅力を伝えるには

徳川 広和

「きしわだ恐竜教室」の取り組み

昨年（2009 年）より、きしわだ自然資料館では、恐竜を題材とした「きしわだ恐竜教室」を約三ヶ月に一度のペースで開催しています。恐竜のイベントと言うと「夏」というイメージですが、一年を通じての定期開催にする事で、子供達が何度も参加し、知識と経験を積み重ね、より深い古生物学への興味に繋がれば、と企画しました。当初は毎回定員をオーバーする申し込み＆初参加の子供がほとんどで、それに合わせ教室の内容も更新出来なかったのですが、今年 8 月には新しいプログラムでの教室も開催し、今後は、より内容に広がりのあるイベントとして展開出来ると期待しています。

一方で、この教室には恐竜・古生物を題材に「未知の事柄を自分なりに考える」事を子供達に学んで欲しいという目的もありました。ですから、講師を務めて頂く皆さんには、ただ知識を増やすだけの内容ではなく、子供達に考えさせ、それを積極的かつ気軽に発表出来るような雰囲気作りをお願いしています。現在、講師は大学で古生物学・地質学を専攻している学生さんがメインですが、皆さん、教育・啓蒙活動に熱心な方ばかりで、子供達の興味と積極性を引き出し、場を盛り上げていく工夫は私のほうが驚くほど。私も教える側として学ぶことが多い教室になっています。

恐竜・古生物本の選び方

恐竜・古生物の魅力を伝える媒体として本の役割は大きく、また教育に関わる仕事をされる場合、参考資料として使用する事も多いと思われます。しかし、古生物、とりわけ恐竜の本となると、今も昔も人気の題材で、夏休み前ともなると特に多くの本が出版されますが、そのすべてが必ずしも良質な物ではありません。そこで、私個人の考える良質な本の見分け方を今回は 2 つ、紹介します。

まず一つ目は「発行年が 10 年以内である事」。他の分野と同じく、恐竜・古生物の分野も常に新しい発見・研究が発表されており、数年前の学説が否定される事も珍しくありません。従って、本を選ぶ際にも初版発行年（翻訳書の場合は原書の初版発行年）が新しいもの、おおよそ 10 年以内に発行の物を選ぶと良いでしょう。数十年前の本でも未だ色褪せない素晴らしい物も多くありますが、それは恐竜・古生物への興味が更に深まった時に改めてその価値が判る物かと思います。

次は「研究者による監修がされている事」。特に大学・博物館等に在籍し、今まさに研究の現場に居られ

る方の監修による本は、情報の新しさや正確さの点で安心できます。研究者でない方の著作で非常に良質な物もあるのですが、玉石混交の中からそれを見極めるのは、専門外の人間にとってはなかなか難しいものです。その点で、現役の研究者による監修は、内容を保障する判り易い目安の一つと言えるでしょう。

相次ぐ化石の発見や、学説による復元の変化等、古生物学は科学の中でも研究の進歩が眼に見える形で把握しやすい分野の一つと言えます。野外での発掘の参加など活動的なアプローチの方法もあり、間口の広い分野とも言えるかも知れません。学校の授業や博物館等で恐竜や古生物に接する事が、理科そして科学分野全般への興味の一助になるのでは、と考えています。



著者の造形による恐竜模型 写真左はトリケラトプス、右はティラノサウルス

(とくがわひろかず：自然資料館専門員)

史料に見る岸和田祭の歴史(3)

山中 吾朗

幕末の岸和田藩士で、明治時代には堺県副議長や南・日根郡長などを歴任した熊沢友雄が、嘉永5(1852)年から明治28(1895)年まで記した日記が残されています。今回は「熊沢友雄日記」(以下、「日記」と略す)より岸和田祭の関係記事をいくつか紹介しましょう。なお、引用史料は読みやすいように適宜原文を改めています。

慶応2(1866)年は「御神事、時節柄に付、檀尻出ず、太鼓台ばかり也」(慶応2年8月13日条)と熊沢は記しています。この年は第二次長州征伐が実行されたこと、米価の高騰で各地で打ちこわしが頻発したこと、不作であったこと等に加え、7月には將軍家茂が急死したこともあり、藩から祭礼や鳴り物の禁止が命じられました。ただし、祭礼日に神社の境内で太鼓をたたくことだけは許可されていたので、熊沢は「太鼓台ばかり」と書いたのです。ここで言う「太鼓台」は、恐らくは貝塚や堺にあるような布団太鼓ではなく、文字通り太鼓を台に載せて境内でたたく程度のものと考えられます。翌慶応3年もだんじりは出なかったと「日記」に記されています。江戸時代には質素儉約令が度々出され、儉約のためにだんじりが出なかった年もありました。毎年必ずしもだんじりの曳行が許されていたわけではなかったのです。

明治になってもコレラなどの伝染病の流行によって祭りが延期になったり、中止された年もありました(明治15年・同18年など)。また日清戦争中もだんじりは曳き出されませんでした(明治27年9月15日条)。

しかし、明治時代にはそれ以外の事情でだんじりの曳行が禁止されることはほとんどなかったようで、「日記」にはほぼ毎年祭りに関しての記事があります。ただし、一度だけ、だんじり祭りそのものが存続の危機を迎えたことがありました。

氏神祇園社(岸城神社一山中注)祭礼日たりといえども平日の如し、民なお旧暦を守り、新暦を奉ぜず(明治6年8月13日条)

明治6年8月13日は新暦の祭礼日でしたが、だんじりは曳き出されませんでした。熊沢は人々は旧暦に従っているため何事もないように記しています。しかし、その事情は翌年になって明らかとなりました。

氏神祭典に付、檀尻出し、市中近日これ無き賑わい也、そもそも昨秋祭式の節、町浜より檀尻を出し、神拝せん事を切に県庁に請えるに、更に許可これ無し、檀尻は損有りて益無く、今よりこれを出すべからざるの旨、厳令これ有り(明治7年8月13日条)

明治6年にもだんじりを出すことの許可を岸和田町・浜から堺県庁へ願い出ていたのですが、県はこれを許可しませんでした。理由はだんじりは損は有っても益がないので、今後一切禁止する、というものでした。「日記」は続いて次のように記しています。市中よって無益の長物と見なし、廉価に売却せんもの等これ有り岸和田では堺県が今後だんじり曳行を許可しないというので、だんじりを安く売払うという噂もあったそうです。もし堺県の方針がこのまま変わらなければ、岸和田のだんじり祭は明治5年で終わってしまっていたことでしょう。しかし、いかなる事情かわかりませんが、翌年になって県の態度が一変しました。翌明治7年には堺県の方針は「ひそかに願い出れば許可する」となり、この年は2年ぶりにだんじりが曳き出され、「市中近日これ無き賑わい」と熊沢が記すほどに盛大な祭りとなりました。ともあれ、こうしてだんじり祭り存続の危機は逃れることができました。岸和田の旧市の祭礼日は、江戸時代には旧暦の6月・8月・11月の各13日で、そのうち6月と8月の祭礼にだんじりが出されました。町五町と浜七町及び岸和田村が6月と8月に交互に曳き出していたのです。やがて6月は暑いので、8月のみ隔年または2日間に分けてだんじりを出すことになりました。明治9年、堺県からの通達により、岸城神社の祭日は岸和田天神宮と共に9月15日と定められました。熊沢は次のように記しています。

往古より我氏神祭日六月・八月・十一月共に十三日を以って神祭を行うのところ、本年より堺県の令として岸和田北方ならびに野村町迄同日に相成り、今月十五日を祭日と定めたるの由、維新以来時勢の権宜を尽くさず、百事古を非とし、ひいて神式祭日を改むるに至る、その理のある所を知らず、神慮如何又知るべからざる也

熊沢は、維新以来、何事も古い慣習を否定し、祭礼日さえも強制的に改める県の姿勢を批判し、神慮はいかなるものかと疑問を呈しています。この年の祭礼当日は大雨が降り、「果たして神慮祭日の改日を歡び給わざる」と熊沢は記しました。ともかく、平成17年まで続いた岸和田だんじり祭の祭礼日は、明治9年に堺県の命令で定められたものだったのです。

なお、「熊沢友雄日記」は、現在、『岸和田市史史料』として順次刊行中です。これまで、嘉永5年～明治10年まで刊行し、有償頒布しています。ご希望の方は郷土文化室郷土史担当までお問い合わせください。

(やまなかごろう：郷土文化室)

information

■岸和田城の展示案内■ 企画展「郷土の書家」

岡部文錦・岸琴泉・相馬九方・小川翠村ら江戸～昭和期に活躍した岸和田ゆかりの書画家らの作品約 20 点を展示します。

- ・会 期：平成 22 年 9 月 29 日(水)から 12 月 5 日(日)まで
- ・入場料：大人 300 円、中学生以下無料、25 名以上団体 3 割引
- ・時 間：午前 10 時から午後 5 時(入場は 4 時)まで
- ・休場日：月曜日(但し、10 月 11 日は開場します。)
- ・主な展示資料：岡部文錦筆「梅に鴛鴦(おしどり)図」／岸琴泉筆「山水図」／小川翠村筆「春秋」／相馬九方筆「七言絶句貼交屏風」ほか
- ・問合せ先：郷土文化室(TEL:072-423-9689)

■きしわだ自然資料館の展示およびイベント案内■ 特別展「モササウルス」

モササウルス類は今から約 9,800 万年前、恐竜時代の後半になってから海に進出したトカゲのなかまです。岸和田周辺の和泉層群からも、その化石が見つかっています。

今回は、2006 年に和歌山県で発見された「ひれ足」部分の化石をはじめ、日本や外国の化石を豊富にそろえました。さらに、最新の研究成果を盛り込んだ生態復元画(小西卓哉氏監修・小田隆氏作画)も、世界に先駆けて公開します。

- ・会 期：2010 年 11 月 3 日(水・祝)から 1 月 30 日(日)まで
- ・会 場：きしわだ自然資料館 1 階ホール
- ・入場料：大人 400 円(常設展示含む)、中学生以下無料
- ・休館日：月曜日(祝日は開館)、11 月 4 日(木)、24 日(水)、30 日(火)、12 月 24 日(金)、29 日(水)～1 月 5 日(水)、11 日(火)
- ・展示構成：モササウルスって何?／モササウルスの生きていた時代／モササウルス研究史／モササウルス進化への道／最新の研究成果にもとづくモササウルス復元／歴代復元画から見る研究の歴史ほか

特別展開催記念 古生物復元セミナー 科学とアートの融合

- ・日 時：2010 年 12 月 18 日(土) 午後 2 時～4 時
- ・会 場：だんじり会館会議室
- ・講 師：小西卓哉氏(カナダ王立ティレル古生物学博物館研究員)・小田隆氏(成安造形大学准教授)・徳川広和氏(自然資料館専門員)
- ・対 象：高校生以上
- ・定 員：40 名
- ・費 用：400 円(特別展入場料)
- ・申 込：当日午後 1 時 30 分より先着順

特別展開催記念講演会「モササウルスのいた海」

- ・日時：2010 年 12 月 19 日(日) 午後 2 時～4 時
- ・会 場：だんじり会館会議室
- ・講 師：小西卓哉氏(カナダ王立ティレル古生物学博物館研究員)・篠原暁氏(沼田町化石館)・小田隆氏(成安造形大学准教授)
- ・対 象：高校生以上
- ・定 員：40 名
- ・費 用：400 円(特別展入場料)
- ・申 込：当日午後 1 時 30 分より先着順

モササウルスのいる海にいた生物の化石をさがそう

和泉山脈をつくる中生代白亜紀の地層「和泉層群」で、地層の観察と化石採集を行います。

- ・日 時：2010 年 11 月 23 日(火・祝) 午前 10 時 15 分～午後 3 時 15 分(雨天中止)
- ・場 所：貝塚市蕎原箱谷
- ・講 師：高田雅彦氏(自然資料館専門員)・加藤守氏(友の会評議員)
- ・対 象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
- ・定 員：40 名(保護者含む)
- ・費 用：一人 50 円(保険代)
- ・申 込：往復はがきか電子メール(携帯電話からは不可)で、11 月 1～15 日(必着)の期間に、保護者を含む参加者全員の郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号を記入し、自然資料館「化石採集」係までお送りください。申込者多数の場合は抽選となります。

※お願い [fromM]は、学校教職員に 1 部ずつお配りください。

担当の方はお忙しいところ申し訳ありませんが、よろしくお願い申し上げます。

【from M】では、みなさまからのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしております。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、ぜひご投稿ください。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、右記の宛先までお送りください。電子メールでも受け付けています。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町 6-5 きしわだ自然資料館
TEL: (072) 423- 8100 FAX: (072) 423- 8101
Email: sizen@city.kishiwada.osaka.jp
自然資料館ホームページ URL:
<http://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/shizenshi/>
Yahoo Japan の検索で「きしわだ」と入力し、検索すれば、簡単です)